［講演要旨］　融合文化としての記号論的生命倫理の可能性

ートルコ　アスクレピオンの遺構を手がかりとしてー

A Possibility of Bioethics of Symbolic Logic for Fusion of Cultures

坂本　百大
SAKAMOTO Hyakudai

20 世紀後半を彩るニュールックの最先端的学問として文科系では「記号論　Semiotics」と文系、理系にまたがるものとして「生命倫理　Bioethics」があった。それぞれの分野を表現する学会が国内的、国際的に成立し、私自身もこれらの運動に当初から深く関与し、時にそれらの学会の会長を務めたりして、これらの学問の発展に尽くしてきた経緯がある。

そこで改まって考えてみると、この二つのあたらしい学問はその源流をたどると意外にもその起源はかなり古く、ともに、古代オリエント文明にたどり着く。しかもある一人の傑出した医師に。その名はヒポクラテス。ギリシャ、アスクレピオス学派の哲学者、医学者、「医祖」とも言われる。

生命倫理の分野では、世界最初の生命倫理の表現はいわゆる、『ヒポクラテスの誓い』であるという。また、他方、記号学のそもそもの創始者はやはりヒポクラテスであるという。記号学の欧文名は「semiotics」であるが、これはギリシャ語のセメイオン（semeion 記号）に発する。ヒポクラテスはここから semeiotike という語を造語し、ひとつの医学上の専門学問分野を成立させた。彼はそれを現在の‘診断学’のような意味で用いたらしい。すなわち、ある身体上の症候を記号として病気の本質を診断するということであろうか。semiotics という語は現在も診断学という意味の専門医学用語として残っている。そもそもの始まりにおいて記号学と医学、記号論と医療とが融合していたことが示唆的である。この事実が世界最初の医療施設、かつての小アジア、現在のトルコ、ベルガマにある‘アスクレピオン’遺跡に象徴的な形で残されているので、その跡を古代融合文化の一つの証言として辿ってみたい。

西洋医学の原点は古代ギリシャ時代に医神と称された伝説上の医師アスクレピオスを始祖とするいわゆるアスクレピオス学派の活動である。そして彼らが作った医療施設がアスクレピオンである。彼らの医学において興味ある特徴はその死生観である。アスクレピオンはまず死を忌み嫌い、死を絶対に近ずけなかった。死ぬかもしれない重病人は絶対に入院させなかった。また、同時に、出生も医療の対象としては認めなかった。アスクレピオンのなかでは出産は禁止されていた。これらのことはこの学派の死生観、医療観を示して

興味深い。要するに医療、医学は、生と死を除外して、その中間期間にだけ適用するものであった。しかもその中間期間は何の不自然な（手を下した）治療をするのではなく、とにかく患者が‘生’を楽しみ、‘文化的に充実する’ことを企図することを医療と考える思想に貫かれていた。この事実がその遺構に見事に残されている。あの列柱の大通りを見よう。ここにはきらびやかのショッピングモールが日夜繰り広げられていたに違いない。おそらく世界の物産が売られていただろう。あるいは、大道芸人が芸を競っていたかもしれない。驚くべきは、付属施設として大図書館と大劇場が作られていたことである。この図書館は当時の世界最大級のものであったらしい。ようやくパピルスの時代から次世代の紙（ここベルガモンの地で発明されたパーチャメントという羊皮紙）が登場し、それらを丸めて壁の穴に入れるという、この地独特の方法で保存したらしい。湿気を避けるために図書館全体が二重壁に作られていたというのも驚異である。その壁の一部が今も残っている。しかし何故病院にかくも大きな図書館が併設されていたのだろうか。実はこの時期、病院は最高の学問の府であったのである。（この膨大な図書はその後あのアントニウスによってクレオパトラに送られ、そして、残念なことに、あのアレキサンドリアの大火によってすべて焼失したという。）しかし、何より、ここにまた立派な３５００人入るという半円形大劇場が付置されていたということに特別に注目したい。大理石の舞台と貴賓席。何故、病院に劇場が?　要するに当初において、医療はひとつの総合文化の記号論的営為として成立していたのではなかっただろうか。実際に、病んだ（あるいは、まだ病んでもいない）人達（おそらくみな金持ちで裕福な文化人３５００人）がここに入院し十分に静養し、最新の学問に接し、文化の最先端をいく音楽や演劇を楽しみ、そしてリフレッシュして明るく元気にこの施設から出て行ったのではないだろうか。ここに医学、医療の原点のひとつの、現在と大きく異なる意外な姿が見えて面白い。このアスクレピオンでヒポクラテスはある時期、働いて修行をしていたらしい。彼が、一方において医療倫理、生命倫理の、そして他方において文化的記号論の始祖であるということの意外の事実の理由が示されているようで示唆的である。新しい文化はこのように一つの文化総合、文化融合として始まり、またやがてその発展の究極において再び総合文化として統合、融合されていくものではないだろうか。

（融合文化学会講演要旨　2007 年 3 月 27 日　於：日本大学会館）